

## 2016年秋学期を振り返って

### FUNAI OVERSEAS SCHOLARSHIP 第2回報告書

武田悠作

7月に渡米して5ヶ月が過ぎ、2016年も終わりを迎える。船井財団とハーバード経営大学院の様々な支援のおかげで何の不自由のない、学業一筋の生活を送ることができている。有意義な人間関係を数多く築き上げることもできている。「プロフェッショナル」でありなおかつ「経営学研究」という共通の趣味を共有しあえる仲間との交流は学部時代のそれとはまた一味違う。



経営大学院の竹内弘高教授とノースカロライナ州所在の Honda Aircraft Company に訪問した際の写真（その1）。藤野道格社長と記念の一枚。

私は米国の大学で学部時代を過ごしたが、やはり大学院ならではの新鮮さがある。研究に精を出しながらも、コースワークを大切にするという一見相反する目標の両立が簡単に見えて意外に難しい。

言うまでもなく、博士課程で最も重要なのは研究成果を出すことである。博士課程の最初の2年間は、修士課程の2年間と同義に捉えられがちだが、実際は別物である。修士課程は学位取得後に実際に社会に出て学んだことを応用する目的も考慮されているため、応用に重きを置いているものが多い。主にクラスを複数履修し、一定の単位を満たしそれを総括するような論文を書けば学位が授与される仕組みのものが多い。一方、博士課程は研究者養成を目的としてカリキュラムが組まれているから、最初の2年間でも相当量の研究が求められる。特に、経営大学院のトップ校では、博士取得後にポスドクなどの研究職を経ず、研究機関または経営大学などに助教として就職することが当前とされているため、卒業する5年目あるいは6年目までには博士論文だけではなく、幾つか評価の高い学術誌に論文を記載するか記載予定の論文があることが理想とされている。論文を寄稿してから実際に記載されるまでに2～3年かかることを考慮すると、2年目の終わり、遅くとも3年目の初めに初稿を寄稿するくらいの時間感覚で研究に励まないと取得までの掲載に間に合わない。だから、1年目といえども、研究をおろそかにすることはできない。

もちろん、研究だけではなく、コースワークを疎かにすることはできない。最低限維持しなければならない一定の成績というのもある。だがそれ以上に、研究の根底となる理論や方法論などを短期間で身につけるにはコースワークの内容は非常に有意義だ。だから、必ずしもコースワークの手は抜けない。この両立が意外と簡単ではない。「良い成績」が最重要視される学部時代に慣れている学生はなおさらである。

今学期 は以下の科目を履修した。：

- ミクロ経済学

ミクロ経済は社会科学を語る上で避けて通れない基礎科目であるため、必須ではないが念のため受講した。経済学の学生などと交流できたことは有意義だったが、予想以上に時間と労力がかかった。それなりに学ぶことも多かったが、レクチャー形式だったこともあり淡々とした非常にドライなコースであった。

- 計量研究法

主に社会学部の学生と履修した。思った以上に難易度が低く、少し物足りない感もあった。それでも、計量方法を利用した社会学の研究ではかなり著名な教授が非常

にわかりやすく噛み砕いて指導してくれたおかげで、こらからの研究のための良い基礎を築くことができたと思っている。

- ミクロ組織行動学

専門が組織論でありながら、生まれて初めて実際に「受講」した組織に関するクラスとなった。ミクロ理論は産業心理学が中心のため、慣れないこともあったが、最終的にはモノにしたと思う。マクロ視点が専門の私にとって、新しい視点を与えてくれた。組織の専門家として、ミクロ学者の論文を理解することができるようになったことは、組織の専門家としてミクロ系学者の発表にも意見交換などで積極的に貢献できるようになったこと、心理学独特の概念構成の作法、概念の関連性、理論構築の仕方、データ収集・分析方法など、得たものは多い。

今学期、いろいろなことに興味を沸くことは研究者としてはメリットでもありデメリットでもあることが謙虚に現れた。学術的な興味に焦点を絞ることは有益なことだが、一方、様々な、しかも、世界トップクラスの研究者に囲まれていることはある意味「誘惑」にもなってしまう。興味深い研究や、自分の研究と関連性が見える研究があまりにもありすぎて、道に迷ってしまう。

迷ってしまった時に重要なのは、専門分野の研究者コミュニティをよく観察すること。それぞれの分野に政治的、文化的な要素を含めて様々な社会構造がある。意思疎通の仕方、意見の延方、良い研究と悪い研究の判断基準まで若干ながら違う。例えば、私が頻繁に出入りをしている組織行動学科ではお互いの研究の内容を深めたり、新たな視点を得ることができるよう手助けをする文化が確立している。そのため、セミナー等も他校から招いた発表者であっても、「アドバイス」を与える形の質疑応答が多く見られる。いわゆる、「ソフト」な質問である。一方、同じハーバード経営大学院の某研究科では、セミナー等での発表内容をこれでもかというくらい徹底的に批判する。批判的に研究内容に接することで、その研究の弱点が明らかになるからだ。お互いの研究を高め合うという究極的なスローガンは同じでも、この学科は「ソフト」ではなく「ハード」な質疑応答を重視する。そういう文化が明らかになってくればくるほど、自分自身がどの研究者コミュニティに適しているのかということを考え始める。分野を決めることはそのコミュニティに永年会員になるくらいの覚悟をするべきだと強く感じる。それを踏まえて、今学期は、分野間の壁にとらわれず、様々なセミナーや研究発表に参加したり、教授に面会したりすることに努めた。



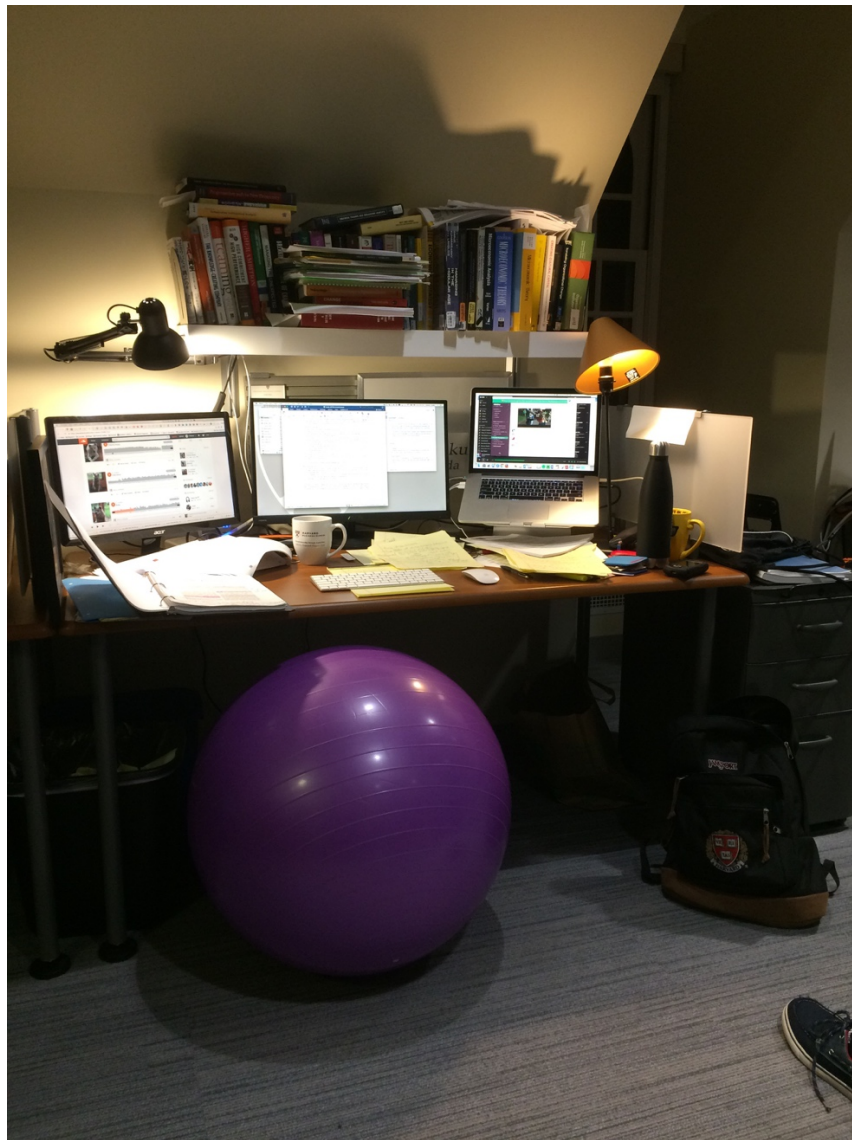


経営大学院キャンパスの美しい紅葉



最終的には、助教授の一人と非常に仲良くなり、共同研究を発足した。ボストンに本社のある、某デザイン・コンサルティング会社のクライアント からデータ採取ができることになり、向こう一年は必要なデータ採取に費やす予定だ。最終的にインパクトのある研究に突ってくれればと願うばかりだ。

なにはともあれ、まだ一年め。某教授曰く、” First year in graduate school is mostly about survival. So, survive! And you will be just fine!” (大学院一年めは「生き残り」が大事だ。生き残れ。生き残りのために目の前のことに打ち込んでるだけで、自ずと先は見えて来る)。僕自身、今学期は余裕を持って「生き残った」という自負がある。



生き残りの秘訣はこの「バランスボール」。インナーマッスルを鍛え、腰痛を予防してくれる。集中力もアップする。